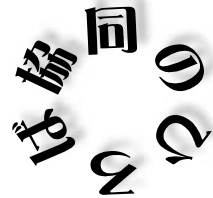


生活・労働・地域の再生と結束 力強い反戦平和の波を

日本ジャーナリスト会議主催

「世界の平和とアジアの未来を考える緊急の集い」での発言

菅野正純（日本労働者協同組合連合会）



(5月17日、東京・星陵会館で標記の集いが開かれ、特別発言の機会を与えられました。集会は、国際政治学者の武者小路公秀氏（中部大学）の記念講演と、歌手・喜納昌吉、映画監督・神山征二郎両氏の公開対談を中心に進められました)

発言の機会を与えていただき、感謝申し上げます。

大量失業とグローバル資本主義の破局的状況に対して、働く人々・市民が自らの労働の意味を問い直し、「営利企業に雇用される」働き方だけではなく、それを超えて、自分たちで出資し、経営し、人と地域に役立つ仕事をおこす、「協同労働の協同組合」に取り組んでいる者です。

生命と人間の尊厳を根本的な価値として、生活・労働・地域の人間的再生への運動と反戦平和の運動が相乗的に発展していくことを願って、発言させていただきます。

(以下、原稿を読み上げました)

私たちの本日の集いに先立って、スピーディーに有事法制を衆議院で通過されたと野党の皆さんの手際に、心から敬意を表します。

政権にすぎりつきたい、政権にありつきたいという一点で結びつかれた、皆さんの

結束力には賛嘆の念を押さえることができません。

「議員の精神分析」を書かれた、水島広子先生には、ぜひ「民主党と先生自らの精神分析」をお書きいただくようお願い致します。

いま、日本の政党政治、議会制民主主義は、頭から腐り始め、溶け出しました。

しかし、これほどの欺瞞があるのでしょうか。

「武力攻撃の恐れ」どころか、「武力攻撃」そのものをほしいままに推し進めたのは、アメリカ政府と、それに犬のように追随する日本政府ではなかったでしょうか。

「有事体制」は、この両国政府にこそ向けられなければなりません。

この両国政府は、失業と経済破綻に対して、最も無能な政府であることは周知の事実ではありませんか。働く人々は、「安全」からほど遠く、放置されています。

アメリカ「帝国」による恒常的な「世界戦争体制」が、人間と自然を搾取し尽くしてき

た、グローバル資本主義の至りついた先であることを、世界の民衆は見抜いています。

だからこそ、シアトルからポルトアレグレでの結集が、グローバル資本主義への断固とした闘いを燃え上がらせ、フィレンツェでの欧州社会フォーラムの100万人の行動が、世界同時反戦行動をもたらしたのではなかったでしょうか。

いま、ILOは人間と労働の尊厳をかけて、「ディーセント・ワーク」を最大の戦略目標に据えると共に、今年の総会において、「協同組合促進に関する勧告」を採択しました。

反グローバル運動の拠点である中南米では、いま、労働者協同組合が急激な成長を遂げています。

もう一つの拠点、ヨーロッパでは、労働者協同組合、社会的協同組合をはじめとする、「社会的経済」が、経済社会の中で確固たるセクターを形成しています。

政治の品格を決めるのは、民衆の自立的な運動と、その構想力の高さ以外にありません。

私たちの労働と生活の根底から、経済社会の人間的再生のビジョンを鍛え上げ、反戦平和の強固なネットワークを形成しようではありませんか。